# 教職大学院 Newsletter No.154

福井大学大学院　福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2022.1.24（公開版）


今年度（2021 年）４月、福井大学では学部、教職大学院、附属学園「３組織を横糸として３組織を通貫する業務内容や構成員のアイデンティティのあり方に縦糸を通す」（松木健一　ニュースレター147 号　巻頭言）ことを任務とした「総合教職開発本部」が設置されました。本号では総合教職開発本部を構成する部門会議の中からインクルーシブ教育部門会議（以下、インクルーシブ教育部門と記す）について紹介いたします。

## 福井大学教育学部附属学園の インクルーシブ教育をすすめる力として


福井大学総合教職開発本部　インクルーシブ教育部門会議

荒木　良子（副部門長）


先日、ＮＨＫの連続テレビ小説（通称、朝ドラ）で、「木漏れ日」という日本語にあたる英語はないというようなやりとりが耳に入ってきました。福井大学教育学部附属学園に設置されている学園相談室は「こもれび」★1と言う名称です。相談室に名称を付けたときのことを思い出しました。子どももおとなも、温かく、柔らかな光を浴びて、ほっこりできるような場所でありたいという願いがありました。今年度（2021 年）４月に、総合教職開発本部インクルーシブ教育部門会議（インクルーシブ教育部門と記す）の設置が示されたときに、これまで「こもれび」が担ってきた役割が明確に示され、より力強い組織になり、インクルーシブ教育を進める力を得た思いでした。「こもれび」が担ってきた業務に重ねながら、動き始めたインクルーシブ教育部門について、簡単にご紹介いたします。

★1 「こもれび」の実働メンバーは幼稚園・前期課程・後期課程・特別支援学校の特別支援教育コーディネーター、養護教諭、スクールカウンセラー、大学教員（荒木／藤岡）から構成されます。

インクルーシブ教育部門の特徴はそのメンバー構成にあります。部門長は附属学園校長（北先生）であり、部門の仕事を担うスタッフは、附属学園（幼稚園、義務教育学校前期課程、後期課程、特別支援学校）、医教連携として子どものこころの発達研究センター、教育学部、教職大学院から成り立っています。第１回部門会議では、子どものこころの発達研究センターの先生方は附属学園に足を踏み入れたのが初めてとのことで、「こもれび」のこれまでの取組を紹介したところ、「こういう活動をされていたのですね」と言っていただき、医教連携の第 1 歩はお互いの仕事を

内容


巻頭言 (1)
スタッフ自己紹介 (3)
ミドルリーダー/マネジメントコースだより (6)
インターンシップ/週間カンファレンス報告 (13)
合同カンファレンス (15)
修了生だより (25)
図書紹介 (28)
お知らせ・スケジュール (29)

知ることからでした。また、それぞれに足場を置く所属の説明もして、「この会議そのものがインクルーシブですね」と子どものこころの発達研究センターの松崎氏は言われました。「こもれび」では、附属学園の中でインクルーシブ教育推進のセンター的機能を果たすという使命をもって、特別支援学校の教員が、中心的な役割を担っています。３校園が校種を越えた組織となっているのは「こもれび」の特徴でしたが、それが、さらに拡大され、力強い組織になりました。

部門会議に示された業務は下記の通りです。インクルーシブ教育の推進、つまり附属学園の子どもたち、誰一人取り残されることなく、一人一人がみんなの中で、最大限に自分の力を発揮して、互いに成長し合うことができることが、部門の願いです。

1. 附属幼稚園入試（特別枠）
2. 附属義務教育学校入試（特別枠）
3. 特別支援教育コーディネーター養成
4. PBL におけるインクルーシブ教育
5. 個別相談・個別学習
6. 部門の活動計画の企画・立案・実施
7. その他必要な業務

インクルーシブ教育は、日々の保育や授業作り、学級経営など、園・学校生活全体を通して取り組まれる日常そのものです【４．PBL におけるインクルーシブ教育】。９年生生徒たちと面談をしていると、他者の中で他者と共に活動を創り上げていくことの難しさと手応えとそこに力を発揮できたことを、自分の成長として語ることばが多く聞かれます。

そんな中でも、子どもたちは一人一人、違い、様々な個性、特性を持ち、日々の学校生活の中で苦戦する子どもたちの姿があり、その数は、市町の学校となんら変わりません。子どもたちと何とかクラスを作ろう、保育・授業を展開しようと獅子奮迅する先生方の姿があり、素晴らしい実践はたくさんあります。「こもれび」の役割の一つは、そんな実践を先生方それぞれの経験値に留めることないように見取り、意味づけ、附属学園の共有財産とすることです。そして、子どもたちの苦戦に寄り添ったり、先生方と具体的な手立ての内容を検討したりします。特別支援教育コーディネーター（「こもれび」では教育相談コーディネーター）やスクールカウンセラー、大学・教職大学院の教員たちは、通常の保育や授業、学級での様子を継続的に参観し、苦戦の状況を見取り、その要因や背景を探り、先生方と共に手立てを検討していきます。子どもの苦戦する状況、要因や背景を整理して、手立ての検討に役立てるために、面談、検査などの個別的な係わりを行うこともあります。

保護者の方が安心して子育てをし、学校と一体となって子どもの成長を支えていくことができるように、心配を抱え、養育に悩んでおられる保護者の方の声に耳を傾ける相談活動は重要な役割です。保護者の方と学校が同じ方向を向いて子どもの育ちを考えようと面談を行うことで子どもの状態が落ち着くことがあるほどに、保護者の方との共通理解は大切です【５．個別相談】。子どもの苦戦状況に応じて、クラスの中での成長をたすけるだけではなく、相談室等で個別的な係わりを行うこともあります【５．個別学習】。個別的に深く寄り添うことだけではなく、一方では、大きなセーフティネットとしてスクールカウンセラーを中心に全児童生徒の面談を実施しています。前期課程ではグループ面談、後期課程では個別面談です。第一義的には子どもたちが学校には頼ることができるいろんな大人がいる、何か困ったことがあれば、話を聴いてくれる人がいるということをわかっていてくれるといいなと願っています。その中でより丁寧に個別的な面談を重ねていくケースや、時折の見守りを行うケースなど、適時適切な対応を見極めることもします。

これらの業務は具体的には、日常的な参観や観察、担任や授業担当教員との共有（ケースカンファレンス）、具体的な手立ての検討（支援会議）、実施（クラス、個別）、と再検討の繰り返しの中で取り組まれます。子どもたちへの支援が途切れることがないように、幼稚園、義務教育学校前期課程、後期課程と成長の過程に合わせて移行していくようにと繋ぐことも大切な業務です。これらの業務に取り組むスタッ

フの力量を 0JT として繰り上げていくことを「こもれび」では同時に行っています【３．特別支援教育コーディネーターの養成】。これらの取組全体を「こもれび」では学園相談室担当者連絡調整会議として、校種を越えて立案と実施と振り返りをしてきました【６．部門の活動の企画・立案・実施】。

インクルーシブ教育部門の設置時に新たに加わったのは「特別入試枠」にかかわることです。知的な発達に支障はありませんが、様々な特性故に、育てにくさ・育ちにくさが生じてしまい、生きづらさを感じ、家庭や学校生活で苦戦する子どもたちを、入園・入学選考段階から特別枠を設けて、受け入れて、保護者と共に子どもの育ちを支援していこうというものです。英才教育ではなく、みんなの中で、最大限に自己を発揮して、みんなと共に成長していくという、すでに附属学園で取り組まれてきたことを、明確に打ち出し、その仕組みをさらに補強していくものです。インクルーシブ教育部門として学部・教職大学院の教員と「こもれび」スタッフが加わり、今年度は入園・入学選考に向けて、幼稚園・前期課程・後期課程でワーキングを立ち上げて、選考方法や入学後の体制作り等の検討がなされてきました。インクルーシブ教育部門の大学・教職大学院の教員、「こもれび」のスタッフらが、入園・入学選考にかかわって現場の先生方とともに一緒に働く時間が生まれ、専門性や所属を越えて協働していくことがまた一つ増えました。【１、２入試（特別枠）】

インクルーシブ教育部門は、「こもれび」の取組を有機的に組み込んで、授業研究に関わるなど学校生活全体を通して、全クラス参観や全児童・生徒面談など大きく全体を見渡す活動と、個別的な相談や学習場面による係わりに取り組み、保護者相談など保護者との願いを合わせて、12 年間途切れることなく子どもの成長を見守り、たすける役目を担っていきたいと願っています。

# スタッフ　自己紹介

**福井大学連合教職大学院 准教授／福井県教育総合研究所　林　淳子**

今年度、福井大学教職大学院に加えていただきました、はやしじゅんこです。どうぞよろしくお願いいたします。４月に教育総合研究所に着任しました。初めての行政職で戸惑い気味のスタートでしたが、上司に導かれ同僚に支えられながら毎日過ごしています。

新採用は丸岡高校でした。小高い丘に建つ校舎から眺める夕日の大きさが印象に残っています。新採用から２年目のある日、校外の英語教員とも繋がりを持ちたい、勉強したいと思いたち、当時福井県英語放送テスト部会のメンバーであった先輩からご紹介いただき、同部会に入りました。以来、20 年以上英語放送テスト作成に携わりました。平成８、９年度に丸岡高校が文部省のティーム・ティーチング研究推進校指定を受けた際、20 代で研究主任に指名され、大慌てで何冊か専門書を読んだことが昨日のことのようです。プロセスライティングをベースに、英語のティーム・ティーチングの枠組みを作成し、外国語指導助手を含む英語科全員で実践しました。生徒が読む・聞く・話す・書くの４技能を統合して使う授業であること、英語でのやり取りを通じてライティングを推敲し書き上げること、そしてその改善のプロセスを評価に加えることを意識した取組みでした。当

時、県の英語指導主事だった松田通彦先生から御助言いただいた「組織的・継続的に実践することが大切である」という言葉が、以来、私の教員生活の信条となっています。

その後、高志高校で、生徒の進路希望実現のため英語教員として、そして担任として14年勤務しました。一生懸命取り組みましたが、目先の偏差値や受験にとらわれ、「主体的・対話的で深い学び」が実践できていたとは到底思えず、当時の生徒に申し訳ない気持ちです。できることなら時間を巻き戻し授業をやりなおしたいと思っています。

３つめの勤務先となる福井商業高校は、着任した年に文部科学省の「英語授業改善拠点校」に指定され、再び先進的な授業研究・実践に向かう日々が始まりました。大きな転機となったのは、その年の夏期休業1か月を利用したアメリカ・ニュージャージー州のラトガース大学での研修でした。ネイティブの教授陣からブルームタキソノミーや外国語としての英語教授方法を学び、自らも他国からの留学生らと一緒に英語の授業に参加する過程で、経験したことのない学びの在り方、つまり、教える側と学習者の双方向のやり取りを通じて、学習者が考え自分の意見を持ち発言するという経験をしました。拙い英語で見当違いなことを言っても受容され聞いてもらえる体験をし、自分の中で「福井でもこうやって授業すればいいんだ！」と胸にストンと落ちるものがありました。スポーツでは子どもたちがまず楽しくプレイし、後から細かなルールを覚えスキルを上達させます。同様に、語学も教え込まれるものでなく、学習者が楽しんで使うことを通して身につけるものだと実感しました。学外では年の近い大学講師陣と週末に食事をしたりお酒を飲んだりしながら、同じことで笑ったり驚いたりすることに、異文化といっても差異よりも共通点のほうが多いのだという当たり前のことに気づき、自然とGlobal Citizenという言葉が浮かんだのでした。帰国後は、研修で得た気づきを実践に活かすこと、生徒が協働し楽しみながら学ぶことをモットーに授業づくりに励みました。最後に担任した生徒たちは、３年間という短い間に英語コミュニケーションスキルを上達させ、英語を生かしたキャリアを目指すようになりました。その内の一人から先日手紙を受け取りました。大学で特待生に選ばれたこと、職業高校出身をハンディと思っていたが普通科高校出身の同級生と比べ得がたい経験をしたと気づき誇らしく思っていること、国際貢献の夢があること、コロナ禍のため留学は難しいが、夢は諦めていないこと、高校時代「国際貢献」をテーマとした授業で取り上げたJICAでインターン研修中であること等が報告されていました。高校での学びが将来の夢につながっていることを知り、大変うれしく思っています。

新採用からこれまで、様々な生徒、教職員、保護者や同窓会、行政の方々と御縁があり影響を受けてきました。当時は気づいていないことが多いのですが、振り返ると幾度か教員人生のターニングポイントがあり、その都度学びがあり知見が広がったと感じています。今年度、院生やスタッフの皆様との出会いに感謝すると同時に、環境の変化により自分がどう変わっていくのか変わらなければならないのか、ワクワクしています。改めて皆様どうぞよろしくお願いいたします。

**福井大学連合教職大学院　准教授／福井県教育総合研究所　飯田　吉則**

本年度より、教職大学院のスタッフの一員として、参加しております、よろしくお願いいたします。

私は、平成９年に福井県の教員として採用され、県内中学校に赴任、16 年間中学校で勤務しました。その後、現附属義務教育学校 前期課程で４年間、勤務することとなりました。公立中学校から小学校、しかも研究校への異動という急激な環境の変化に戸惑いつつ授業を行っていました。そのようなとき、縁あっ

て教職大学院にて院生として学ぶ機会を得ることができました。20 年の教員生活の節目に、教職大学院において他の多くの実践から学び、長期実践報告で自らの実践を振り返ることができたことが、自分にとって大きな意味を持ちました。日々の授業や業務に追われ、振り返ることなく続けてきたこれまでの実践を「省察」できたことで、「児童･生徒はかくあるべき」というそれまでの教育観が自分の思い込みにすぎなかったことに気づくことができました。この省察が、その後の自分の考え方に大きな影響を及ぼしていると感じます。

これまでの実践を振り返るなかで、自分の実践にはＩＣＴという一本の筋があることに気づきました。その筋に沿ってこれまでの実践を長期視点で見直してみると、今度は実践から得た知見を他校に広めたいという思いが強くなっていきました。そこで、学校現場から離れ、教育総合研究所への異動を希望しました。

教育総合研究所では学力調査の担当になり、県内の児童･生徒の学力向上に尽力しました。すぐにＩＣＴ活用を推進するという立場ではありませんでしたが、ＩＣＴは単なる道具であり、児童･生徒の学びを支援するためにどのように使うか、という視点なくして活用はないということに気づくことができました。児童･生徒の資質･能力の向上のために必要な教科教育に関する知見を広めることができ、その上で授業でのＩＣＴ活用について考えるきっかけを得られたことはある意味幸運だったとさえ感じます。

昨年度、国の GIGA スクール構想が打ち出され、コロナ禍もあって一人一台端末環境が急速に整備されました。こうした変化に対応するため研究所内でタブレット端末プロジェクトチームが結成され、チームの一員としてタブレット端末活用推進を行っていくこととなりました。

このプロジェクトチームをコミュニティとして捉えることができたのも、教職大学院でコミュニティに対する考え方を学び、実践を共有できたからだと考えています。普段の業務の中で忘れがちな、今行っていることの状況や価値について、根底から捉え直しができる視点を持つことができました。

教員になってから 25 年間、公立中学校、附属義務教育学校、教職大学院、行政機関といった異なる場を経験しましたが、もし、長期実践における省察という視点がなければ、それぞれの場で行ったことを総括して考えることができなかったかもしれません。

人が環境をつくり、環境が人をつくると言います。

自らこの状況を作り出したとはいえませんが、これまでの環境から学んだことは数知れません。この学びにさらに意味付け、付加価値をつけるのが、教職大学院だと感じております。今年度、こうしてスタッフとして教職大学院に再び参加することができました。学校現場から一歩離れた視点から先生方の実践を見ることができ、改めて省察の大切さも感じています。

微力ながらこれまで得た知見を還元できるように精一杯頑張らせていただきます。どうぞよろしくお願いします。

# ミドルリーダー/マネジメントコースだより

## 出会いと学びのプレゼントをもらって

ミドルリーダー養成コース2年／町田市立武蔵岡中学校　菅野　多岐子

教職大学院での学びの時間もカウントダウンが始まった。思い返せば、この期間にどれだけの出会いと学びがあっただろう。カンファレンスやラウンドテーブルで初めてお会いする方はもちろん、良く顔を合わせる東京サテライト所属の先生方との出会いは、これまでの生活では経験することができないような新たな気づきや視点を私にプレゼントしてくれた。私は、そうした出会いや学びのプレゼントを「もらう」ことが当たり前になってしまっていた1年目を経て、新たにM1の先生方をお迎えしての2年目の今、少しでも誰かに何かをプレゼントする側になってきているだろうか。まだまだやり残したこと、もっと必死になってやらねばならなかったことがあったのではないかと思う。・・・と、反省や後悔の念が多いが、元来が楽天家な私は教職大学院での出会いや学びが楽しくて仕方ないのが本音である。学ぶことが楽しいのだ。この気持ちに出会えたことが教職大学院からいただいた最大のプレゼントだと思っている。

きっと生徒も自ら学ぶことの楽しさを経験すれば、大人が「勉強しなさい！」と声をかけなくても、進んで机に向かったりフィールドワークに出かけたり、世の中とつながろうとしたりするに違いない。そこで、生徒に自ら学ぶことの楽しさを感じて欲しいと始めた今年度の学年での総合的な学習の時間では、生徒たちの様々な学びの様子が見て取れて、伴走している私たち教員もともに経験値を上げている最中である。

総合的な学習の時間のテーマは「地域と自分をつなぐ」である。生徒の興味関心に沿って5つのグループになっており、活動内容も自分たちで考えて実践している。活動当初は、教師も生徒も0からのスタートだったため、教師はついつい口を挟んでしまうし、生徒も先生を頼ってしまう状態となっていた。その状態では、「自ら学ぶ」にはほど遠い。また、口を挟まないようにと思うとやらせっぱなしになってしまい、ともすると生徒の主体性を大切にと謳いながら、実際は放任にしているようになってしまいがちだったのだ。

そうした悩みをカンファレンスで話すと、多くのアドバイスをいただくことができた。カンファレンスで得たことを学校へ持ち帰り、大人も協働しながら試行錯誤を繰り返し生徒へ還元する。そうした活動を継続してきた現在、全てのグループが何らかの形で地域とつながる活動を実践することができている。外部とつながるきっかけこそ教師が提示はしたが、その後の活動では生徒たちが自らやりたいこと・聞きたいことを考えて地域の方とつながっている。まさに、地域の方との出会いが生徒たちに学びをプレゼントしてくれている。また、生徒たちも地域の方に恩返しができないかとあるグループは学校の敷地内で野菜作りを行い、収穫した野菜を学びのお礼にと各グループがお世話になった地域の方にプレゼントするという活動を始めている。誰かのために何ができるかを考えて行動する気持ちというのは、人の心を温かくさせるものだと実感した。この誰かのためにという思いが自ら学びに向かう原動力であり、この思いは人の心を動かす。それ自体が双方にとって気持ちのプレゼントになっているに違いない。

とはいえ、私には依然として経験と学びが足りていない。ミドルリーダーとして、教職大学院で過ごしている時間に得た多くのプレゼントを学校や生徒、私の周りにいる大切な人々にどれだけ還していくことができるか、そのためには院生として残された時

間で、何をしなければならないのかを見つめ学びを深めていきたい。

# 長期実践報告の執筆を控えて

ミドルリーダー養成コース2年／金沢大学附属高等学校　金森　久貴

ミドルリーダーコースだよりを書こうと思って、あらためて自らを振り返ると、ミドルリーダー養成コースに所属しながらも、私自身にミドルリーダーの自覚も責任もないことにあらためて気づかされる。職場ではまだまだ若手のつもりで行動、発言しているし、勢い余って言わなくても良いことを言うこともしばしばだ。ミドルリーダーとは何か、自分自身がどのように学校組織へアプローチできるのか、それを考え続けているこの１年半だったように思う。今回のニュースレターでは直面している長期実践報告について書くのが最も適当だろうと考え、現在のまとまらない考えをナラティブに語ってゆきたい。

長期実践報告のテーマは、現在の所「居心地の良い学校づくり」としている。この内容も書いていくうちに変わってゆくかもしれない。それでも良いと思い、現在考えていることをつづる。そもそも「居心地の良い学校」にこだわる理由はなにか、と考えると自分にとって職場が常に「居心地の良い」場所ではなかったということが背景にある。福井大学教職大学院に来る際にも、最も大きな問題意識は、教員にとってどんな状況が自らのパフォーマンスを向上させるか考えたいということであった。自らのパフォーマンスを阻害する要因は多様だが、多くの場合、生徒との関係性、同僚教員との関係性、管理職との関係性が阻害要因となりえる。また、学校組織が求めるあり方と自分自身の抱える教育課題に共通要因がない場合には、モチベーションを保つことが難しい。

阻害要因となりえるものを見抜き、可能であればそれを取り除き、阻害要因自体が生まれにくい職場のシステムを生み出すこと、そのために自分ができることを考える、実践していくことが今後できれば、教職大学院で学んだ成果があるといえるのではないか。

教員集団の「居心地の良さ」は生徒にとって学校が安心して過ごすことが出来る、価値ある場所であることともつながっていくものと思う。教職員が笑顔で生き生きと過ごすことができない学校で、生徒が生き生きと過ごすことは難しい。逆もまたしかりであり、生徒が生き生きと過ごすことが出来ない学校で、教員が居心地の良さを感じることはないように思う。実際のところ、現在の職場でどの教員も共通にかかわり対話が深まる話題は、生徒の活動や変容、気になるところについての話し合いである。明るい話題も生徒が主体となっていることがほとんどであり、先日は地域の子ども食堂で、学習支援のボランティア活動を行っている生徒がいることが新聞記事によって明らかになり、職員室が明るい雰囲気に包まれたことがあった。

このような、一つの出来事を介して一体感が生まれ、生徒の行動を核として教職員の目線合わせが行われることは良いことであり、これが意識的に発生しやすい環境づくりを行うことが、自分自身のミッションだと現在は考えている。例えば学習支援のボランティア活動であれば、これが単発のイベント、一過性の取り組みに終わってしまわないよう、今後継続的に生徒の活動を追っていくこと、他にも同様の取り組み、興味関心に応じた社会との接点を持つ生徒を増やすような声掛け、働きかけを行ってゆきたい。

この時、「コミュニティオブプラクティス」で学んだ、実践コミュニティの視点を持って、実践を理論と紐づけ、理論のバックボーンを持つ実践になるよう

促していくことができれば、教職大学院で学んだことを活かしたと言えるのではないか。教職大学院での学びによって、生徒の学びに対して近視眼的なかかわり方だけではなく、一歩引いてその取り組みの輪が広がるように支援するかかわり方をするための視点が得られた。これが構想や理念にとどまることなく、生徒とのかかわり、職員集団での共有など、具体的な行動として実践につなげていくことを、今後の自分に課し、その決意を長期実践報告でまとめ、今後の自分自身のありかたを規定していくものを言語化したい。

# 指導主事としての力量形成の一方策

学校改革マネジメントコース1年履修／福井県教育庁　**渡邉　本樹**

現在、筆者が所属する県教育庁高校教育課は、40名弱の指導主事を抱える組織である。平均の在職期間は３年から 5 年程度であり、ほとんどの者が教育行政経験のない教諭から転任してくる。2021（令和 3）年度の職務は、新学習指導要領への移行の対応、一人一台タブレット端末を活用した授業づくり、各高校の魅力化の推進などの指導、助言のための指導主事訪問等、多岐にわたっている。指導主事の職務に対する組織の支援の一つとして、筆者が今年度、留意していることは、訪問時に留意すべき教育改革の動向や施策の背景を共有する時間を確保したほか、継続的に各学校を支援するための情報交換の場の設置（教科主任と本庁、教育総合研究所の教科担当指導主事を Google classroom を用いてオンラインで接続）するなど、指導主事もチームとして機能するような仕組みを作り、個々の指導主事が連携して職務に当たることができるように改善を進めている点である。

篠原、米沢、脇本（2020）によると、全国の教育センター指導主事の年齢は 40 代が最も多く、平均年齢は 47.0 歳である。その登用に当たっては、本庁で決定し登用している割合が 85.9％であり、選考試験を実施（9.4％）している割合は決して高くない状況にあるという。このことは、指導主事の多くが、自身の実践経験だけで任用時からいきなり職務と直面することを示している。学校現場の経験を積んだ中堅の教員から任用されることの多い指導主事が、キャリア形成の中で指導主事としての力量形成をどのように図っていくかという点について、現状は養成のための体系的な体制が整えられているわけではない。それぞれの職場において、任用後に指導、助言を積み重ねていく中で、個々の職務の経験を通じて、必要な資質や能力が培われているのが現状である。

指導主事の役割については、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」の第 18 条に「教育課程、学習指導その他学校教育に関する専門的事項の指導に関する事務に従事する」と規定されている。福井県においても指導主事は、県教育庁、嶺南教育事務所、市町教育委員会、教育総合研究所等に配属されており、所属先によって主たる職務は異なるものの、教員に対して指導・助言を行うことが職務とされている。他県では、任用時に指導主事に対する研修を行っている場合もあると聞くが、法的にその研修体系が位置付けられているわけではない。

筆者は 2010（平成 22）年に当時の県教育研究所に中学、高校の国語の指導主事として着任した。その際の主たる職務の一つは、福井県学力調査（SASA）、および全国学力・学習状況調査の中学校国語の結果分析と指導改善の提案であった。県立高校の国語教員の経験しかない身にとって、中学校国語の学習指導要領の全てを一から理解するところからのスタートは、文字通り手探りで解説書を読み解くしかない日々であった。同僚であった小学校国語の指導主事が義務制での学校の研究体制の実際を教えてくれ、また当時の本庁指導主事や文科省の教科調査官との

出会いもあり、実際の調査結果の分析と中学校の授業見学も進めながら、必要な知識と事例の理解を深めて、調査結果等の分析を行うこととなった。

授業について分析、記録する経験のない筆者にとって、まずは実際の教員と子どもの姿を追いながら、学習指導要領の解説をはじめ、授業研究に関わる諸情報とを結びつけることが必要だった。そのための手掛かりとして、2010（平成 22）年度から 2015（平成 27）年度までの教育研究所在籍の２年間と高校教育課在籍の４年間、指導主事として参観した授業の記録をつけることを試行錯誤しながら行い、自分なりの授業研究の観点を確立していった。その際に工夫したことは、（１）教員の指導のみならず、教員の指導に呼応して起こる子どもの変容を記録すること、（２）教員、子ども双方の変化に対する、自身の評価を明確にすること、（３）評価が確定できないことについて、気付きを書き留めること、の三点である。常に四色ボールペンを持ち歩き、（１）の時間と具体を黒字、（２）を青字と赤字、（３）を緑字で記録し、参観後や他の事例検討の際に、振り返って検証することとした。

木村、岸野（2019）は、参観記録の価値として「書くことを通して実践を吟味し直すことができる」、「自分が実践をどう捉えたのかを自覚する」、「時間や空間を越えて共有が可能」の三点を挙げている。実践経験しかない者が、指導、助言する者として自立するためには、自分なりの授業の見取り方を確立することが必要である。そのために、実践者としての立場から、参観者としての視点を獲得することが必要となる。指導主事の職務の根幹にある、実践を吟味し、批判的に捉えること、そして他者に情報を共有するための資質、能力を養うことが必要なのである。

その後、筆者は、教育委員会では、高校教育課、教育政策課と所属を変えながら、高校の国語担当指導主事や、教員研修等を担当する指導主事として勤務してきた。それぞれの職務において必要となる理論、知識や実践、それに基づく判断は異なるが、職場と職務が変わる中でも、指導主事としての職務に必要な力は、それぞれの業務の背景を理解し、多面的、多角的に判断することのできる視野を持つことであると自覚するに至った。指導される側から、指導する側へ意識改革をすること、その指導主事としての資質、能力の基本を教育行政に関わる初期に経験則として身に付けることができたことは、その後の職務の遂行に大きく役立ったのである。

現在、福井県においては 50 代の教員が全体の約 4 割を占め、教員の年齢構成に偏りが生じていることに加え、教員の大量退職・大量採用に伴い、ベテラン教員から若手教員への知識・技能の継承が大きな課題になっている。このような状況の中で、指導主事に任用される、40 代の実践経験を積んだ年代の教員の絶対数が少ないことは、教育行政を支える人材を確保する観点からも課題となっている。指導主事の任用、育成において、理論の理解と実践の吟味の方法を体系的に獲得するための手立てを一層計画的に行うことが必要なのである。

【参考文献】

篠原清夫、米沢崇、脇本健弘「教育センター指導主事の資質・能力と育成の特徴に関する一考察」国立教育政策研究所紀要第 149 集（2020.3）

木村優、岸野麻衣編「授業研究　実践を変え、理論を革新する」新曜社（2019.6）

福井県教育委員会「福井県教育振興基本計画（令和２～６年度）」（2020.3）

# 手術室で幼児教育を考えた

学校改革マネジメントコース3年／さくら認定こども園　伊藤　康弘

## はじめに

2021 年夏期集中講座 Cycle1a の前後に、体を壊し入院し治療を受けていました。その手術室と入院治療の経験から、幼児教育との関係性を考えていました。その入院治療経験と幼児教育のアナロジーについて書き記します。

## 心臓の不快感

「プロセスコンサルテーション」が Amazon から届き、いよいよ楽しみにしていました、夏期集中講座 Cycle1a が始まるという前週の木曜日 7 月 14 日の夜中に目が覚めて、左胸に不快感を感じました。その日は不快感が消えたのですが、7 月 17 日にまた朝から強い不快感を感じて、かかりつけ医を受診し、処方薬（ニトログリセリン錠剤）を飲むが症状は変わりませんでした。時間の経過と共に不快感が鈍い痛みに変わってきました。7 月 19 日に園の 0 歳児クラスの担任の看護師から受診を強く促されました。それで，かかりつけ医の紹介で大きな病院の循環器内科を受診しました。運動時心電図検査で異常が認められ、続けて心臓 CT 検査を受けました。診察室で心臓 CT 画像を見せられました。主治医の A 医師から冠動脈の左前下降枝（LFDB）が完全に詰まっています。一皮分残してつながっていると思うが、手術は来週月曜日まで待てないと告げられました。入院期間は 3 日と言われましたので、夏期集中講座 Cycle2 に間に合うかもと思いました。

翌日に心臓カテーテル治療を受けました。術後経過も良好で、入院から 1 週間後の 7 月 26 日に無事に退院しました。後日カルテの診断名には、「急性心筋梗塞」でした。

## 心臓カテーテル手術はチーム医療そのもの

私が手術室で受けた治療は、まさしく多職種によるチーム医療そのものでした。患者である私を真ん中に、２名の医師、看護師、放射線検査技師・生理検査技師が、一つのチームとして 2 時間半の手術が行われていました。

リーダー役の B 医師がチーム・マネジメントを行い、A 医師が手術医師であった。A 医師は、私の下腕の動脈から心臓の冠動脈の病部位まで通したワイヤーで治療を行なっていました。レントゲン技師が操作する 2 台の映像装置で撮影した心臓と造影剤で強調された心臓動脈の映像が手術台前の 100 インチクラスのディスプレイに合成表示されていました。映像を見ながら、心臓動脈の中を病部位「左前下降枝」へワイヤーを進ませていました。左前下降枝の太い部分が詰まっていることがわかりました。治療しなければ心臓の左側下部は壊死して動かなくなってしまうと術後に A 医師から言われました。

手術室内での対話は専門職らしく、簡潔で無駄が感じられませんでした。「そこの血栓取れないかな？」と B 医師。「やってみます。」と A 医師。「吸入カテーテルもらえますか？」と A 医師から看護師に依頼が飛びました。看護師が、吸入カテーテルの包装を剥ぐ音が耳に聞こえ、頑丈に包装してあることがわかりました。しばらくして血栓が吸入できて体外に排出できたらしく B 医師が、「今度が一番大きいな」という。「はい」と別のことに集中しているが、上手にできたことを承認してもらえた嬉しさを感じる A 医師の返事が聞こえました。またレントゲン技師が、「その先は綺麗だから、入れなくてもいいと思います。」と助言。B 医師が「そうだな」と同意していました。

私は、手術室チームの真ん中でチームに支えられる患者として手術を受けていました。私にできることは、看護師の「右手は痛くないですか？」という 40 分おきの質問に首を振るので精一杯であった。メンバーは優秀な専門職らしい自信にあふれ、私は真ん中で支えられている感覚でした。一緒にいることが心地よい、安心感の中で手術を受けていました。

### 退院後のケアもチーム医療

術後経過が良く退院が見えてくると、急性心筋梗塞の治療から変化していくことに気がつきました。つまり医療者は，私の健康をさらに良い状態にすることに変化し、そして自身が自分の体を管理することが増えてきました。

退院後の患者の診療は、クリニカルパス（地域連携パス）をかかりつけ医、病院のA医師、B医師、患者が共有して推進していく体制をとっています。患者の健康を支えるのは患者自身であるという考え方も全面にでてきます。クリニカルパスは数ヶ月単位のタイムテーブルに沿って、患者のあるべき健康の状態を定義し、それを達成するために医療者と患者が進むべき道筋が記述されている治療計画です。あるべき状態を外れた場合に、医療側が行うべき診療行為も書かれており、患者に開かれた医療を実感しました。

### チーム医療に学ぶこと

この経験から、幼児教育・保育の世界に 2 つのことを想起しました。1つは、手術室での多職種によるチーム医療が行われている現場を経験して、各メンバーの持つ専門職としての意識とチームマネジメントに感銘しました。心地よい素敵なチームを感じました。

幼児教育・保育の世界でも、子どもを真ん中にした、多職種による問題・課題解決の支援が行われています。幼児教育・保育では、保育教諭、看護師、栄養士、児童心理士、言語療法士、児童福祉行政部門であろう。しかしチームとして機能していることは少なく、縦割り壁も高いことが多いと感じています。子どもたちの抱える課題解決のために、医療の世界から私たちは学べることがたくさんあると思いました。

### 子どもたちの生きる社会

2 つ目は、多職種チームのプロジェクトによる課題・問題解決が当たり前となっている社会を私たちは既に生きていることを知りました。子どもたちは専門性を持つ職業を目指し、さらにチームによる課題・問題解決をプロジェクトスタイルで進めていくことが求められるのだろう。

このようなプロジェクトスタイルの活動を推進できる専門職の育成は、社会からの要請であろうと思います。専門家ということは学び続ける姿勢をも求められるのでしょう。

### Google の専門職マネジメント

入院中にGoogleの組織マネジメントのことを調べていました。Google のマネジメントのことは書籍やNewsWeek の記事で、その自由闊達な文化に単純にあこがれていました。「Google は単なるスペシャリスト型の組織ではなく採用は専門性を問われるけれど、入社後は逆に専門を超えていける主体性を求めている」「軸を持ったT字型のキャリア」とあります。私の大学院の同級生達は、自分の専門分野を越境して頑張っていることを思い出しました。

つまり、子どもたちはある分野の専門性をつけ、さらに自らの専門性を超えていく主体性が必要になるのでしょう。

### 幼児教育・保育の立場から考える

幼児教育・保育の世界から私が想起した話題を整理するとどうなるのだろうか。すぐに OECD が提案した 3 つのキーコンピテンシーで説明できることに気がつきました。1）から 3 つのキーコンピテンシーを引用します。（意訳は筆者）

ここから引用

1）世界と対話(interact)するために道具を使いこなせる。道具は物理的なもの、例えば情報技術と、社会文化的なもの、例えば言語、である。

2）相互依存が増していく世界の中で、人々を関わり合わせられる(engage with)。同質でない集団の中で対話(interact)できることが重要である。

3）自分自身の人生を、主体的にマネジメントし、幅広い社会的な文脈に置き、主体的に活動(act)をする。

省察し、行動することは、3 つのコンピテンシーの中核である。省察は、公式や方法論を適用するだけでなく、変化を受け入れ、経験から学び、客観的立場(critical stance)で考え行動することである。

引用ここまで（引用は文末　参考文献１による）

幼児教育はキーコンピテンシーの根っこを育むという立場から補足します。

1）言葉と数、音楽への興味・関心を持ってもらうことであろう。

2）子ども同士の諍いを、子どもだけで対話で解決できるような環境づくりであろう。

3）子どもたちの主体性を育むことであろう。

子どもたちの 1 日の活動を先生や子ども同士で振り返る活動がつながるだろう。

直接的だが，プロジェクト保育も幼児教育からのキーコンピテンシーを育むアプローチだと思います。社会の至る所で、複合的な課題や問題を解決するために、プロジェクト型の課題解決が実践されています。当園がプロジェクト保育を核にして保育しているのも、ある意味必然性があったと思います。

またコンピテンシーとして、人や社会への信頼感を持つこと、自己肯定感、対話、探求、専門職への憧れ、リーダーシップ・フォロワーシップのような非認知的な資質・能力があげられます。これらの資質・能力の根っこは幼児教育で育みを支援できるだろう。このような資質・能力の学びは、育める機会を経験したかどうかが大きく関わっていると考えています。その能力があるかどうかではなく、園が育める環境を作れたかどうかが問われるように思います。例えば人や社会への信頼感を持つことは、「私はこのクラスにいてみんなとお喋りしてていいんだという確信を持つ」であろう。

**最後に**

幼児教育のことを考えることが多くあった入院だったと思いました。また私の健康を支えていただいた病院の皆様に感謝を申し上げます。また私の不在の間、園で暑くて楽しい夏を過ごしていた職員と子どもたちにも感謝を申し上げます。

本文の医療に関する事と手術中の記載は、私の記憶から書いているため事実と異なることがあります。本稿は入院中に教頭が差し入れてくれた 2) を読ませていただき、触発されて書き溜めたことをまとめています。

参考文献

1) The Definition and Selections of Key Competencies Executive Summary DeSeCo, 2003

2）すべての子どもを深い学びに導く『振り返り指導』小林和雄他、2021

3）Google の組織マネジメントをシリコンバレーで聞いた話

https://www.unicorn-tenshoku.com/google-management-culture/、森山大朗、2020

# インターンシップ・週間カンファレンス報告

## 教職大学院での学びを振り返って

授業研究・教職専門性開発コース2年/坂井市立丸岡南中学校　荒木　裕里香

学部時代に「福井で教員になるのなら福井大学の教職大学院で学ぶといいかもしれないね」と大学の恩師であるゼミの先生に言われた言葉を受け、教職大学院に進むことを決め、当時教員を本気で目指していたかと言われると疑問符しか浮かばなかった私に「学校の先生をいったん本気でめざしてみてもよいのではないでしょうか」というこれまた恩師からの言葉に背中を押され、今現在に至る。新型コロナウィルスが猛威を振るう中始まった大学院生活であったことが大きいと思うが、この 2 年間は常に悩み苦しみ挫折挫折挫折の繰り返しであったように思う。しかし、何も学べなかった 2 年間でないことは確かである。とても多くのことを学んだ 2 年間であり、おそらくまだ現段階では実感できていない学びすらもあるように感じている。

今このタイミングで「インターンシップ/金曜カンファレンス」のテーマでニュースレターを書くことになったのは、偶然ではあるが何かしら運命のようなものを感じる。特に金曜カンファレンスに関しては（No.147 で川西院生が、No.152 で仲村院生がすでに述べているように）、ずっと課題に直面しながら進めてきたカンファレンス運営であるがまさに今佳境を迎えている。インターンシップ、金曜カンファレンスのどちらか一方のことに関して書こうとも思ったが、どちらともを書きたい気持ちが強く、限られた字数ではあるが自身の学びを振り返りつつ報告させていただく。

「インターンって何？」私が一番はじめに直面した壁である。しかし、今までずっと直面し続けている課題でもある。これは私の置かれた状況もそうであるが私の考え方や性格（何事もネガティブに捉えがちであったり勇気を持って一歩踏み出すことが苦手であったり）も災いしてこうなったのであろうと振り返る。最初はともかく戸惑うことばかりで、学びはあるが気持ちが追いついていかないという状況であった。しかし、インターンでの経験を金曜カンファレンスで相談したり、インターン先の先生方との会話をしたりしていく中で、自分の意識が徐々に変化していった。最初は「傍観者」でしかなかった私の立ち位置や関わり方も「観察者」「実践者」のように変化していき、今では微力ながらも「学校を支える」一員となることが出来ているのではないかという実感がある。特に最近は、「インターン生」という、やることが明確に定められていない立場というのは、業務量（時間）的にも精神的にもゆとりがある状態と言えるので、学校の中でたくさんのことに「気づく」ことができるという利点があるということを実感している。いろんな先生方のやり方や考え方に触れられたことは、私の中でとても貴重な財産となった。また、これらの経験を自分一人で抱え込んで考えるのではなく、金曜カンファレンスで仲間とともに省察する過程というのが自身の学びを大きくした要因であると考えている。

金曜カンファレンスは毎週金曜日に院生同士で学び合う場である。その場は主に M2 が主体となって企

画・運営を行う。内容としてはインターン先での学びを振り返る時間も含まれているが、今年度はなんといっても 2 の時間と呼ばれる、公教育について考える時間（「社会を創る力を培うカリキュラム構想」と名付けている）を大きく変革したことが M2 の中でも強く印象づいていると思う（このことは他の M2 が News Letter において 2 の時間について言及していることからも伺える）。昨年度の先輩方から「自分たちの手で金曜カンファレンスを変えることはできるからぜひ自分たちのやりたいことをやってみてほしい」という思いを引き継ぎ、今年度は時間の枠組みから内容まで去年とは大きく変えていった。しかし、もちろんその分たくさんのエネルギーを必要とし、苦労が耐えない時間が続いた。特に M2 で話し合いを行う運営会議はうまくいかないことが多く、各々が思いを抱えながらもそれをぶつけられずに時間が過ぎてしまうこともしばしばあったように感じる（詳しくは川西院生、仲村院生の記事を参照していただきたい）。このような苦しい時間に対してなにかテコ入れをしたほうがいいのではないかという提案で、今現在運営会議の形式を試行錯誤中である。おそらく中には金曜カンファレンス自体が重荷であったり、そこまで労力を割くほど意義を見いだせなかったりといった院生もいたであろう（実際にそういう話を耳にしたこともあるし私自身がそう感じていたときもある）。ただ、私はここでの苦労が着実に自分たちの力になっているように感じている。ここでの思い（もしかしたらそれは負の感情かもしれないが）が強ければ強いほど、それらは学校を、日本の教育（もっといえば社会）を変えていけるエネルギーになるのではないかという思いが自分の中にはある。だからこそ目先の忙しさや負担感から逃げずに、たとえ苦しい道になったとしてもその苦しさと闘うべきであり、闘うことができる環境がこの教職大学院であると考えている。一人では逃げ出したくなってしまうような課題であっても、同じように悩むことができる仲間がいれば乗り越えられる。そう信じて私は残り少ない大学院生活を過ごしていきたい。

# 2 つの言葉

**授業研究・教職専門性開発コース2年/福井大学附属義務教育学校後期課程　三上　泰生**

『教師と子どもは相似形をなす』。これは私が数学の先生になるきっかけとなった授業を行ってくださった先生の言葉である。私のメンターの先生をはじめ、教職大学院に来られている先生方は日々探究し、授業においても子どもと共に探究していることが予想できる。私自身、中 1、2、3 の 3 クラスで授業をする機会を頂いているが、教える授業ではなく、子どもと共に探究する授業を展開している。だからこそ、「先生の役割とはなんだろう？」と自分に問いかけることがある。しかも、ただの先生ではなく、『数学の』先生なのである。汎用的な資質・能力の育成が重要視されている現代の教育において、数学の授業、数学の先生が担う役割とは一体なんだろう？これを考えるためには、数学を専門とする先生方といくら話していても閉じた世界で答えを求めることになる。やはり他教科の先生たちと語り合わなくてはならない。「数学は論理的思考力を養う教科です」、「いやいや、国語でだって論理的に文章を構成する活動を行うよ」、「社会でも資料を根拠に主張をするから論理的思考力が培われる。」。論理的思考力という資質・能力 1 つを取り上げても、先生方は自分の教科のプライドをかけ、語り合うことができるでしょう。このように各教科の持つ本質的な学びの共通点や相違点を比較することで、初めて自分が専門とする教科の持つ固有性が認識できるのだ。この営みは、まさに私が数学の授業で子どもたちと共に行っていることである。中学校 2 年生では、比例と一次関数を比べ、共通点と相違点を探る。一次関数という新たな概念を

探究していく中で、既知の比例とはこうだったよねと子どもの中で捉え直しが行われる。やはり、『教師と子どもの学び方は相似形をなす』と実感させられる日々である。

では、ストレートマスターの院生が集い学びを深める時間となっている金曜カンファレンスはどうであろうか。金曜カンファレンスでは「社会を創る力を培うカリキュラム構想」という名の下に、これからの社会で必要となるであろう汎用的な資質・能力に目を向け、その資質・能力を培うカリキュラムデザインを行おうとしている。行おうとしていることがストレートマスターにとって壮大すぎると感じる先生方もいらっしゃるかもしれないが、これから先、教師として子どもたちと向き合い、教育を進歩させていくためには考えなければならないことであるのは間違いない。ただし、「社会を創る力を培うカリキュラム構想」にすでに答えが存在するかというとそうではない。答えがないものを探究することは苦しいし、もがかなければならない。しかし、答えがないものだからこそ、創造的な学びが生まれる時間となるはずである。私はこの時間のコーディネートを行うにあたって、3年前にもらった1つの言葉を思い出した。

『私が20年以上かかってできるようになった授業づくりに、実習生が20年かかるのでは教育の進歩はあり得ない。経験値の差を超えて授業づくりの課題を共有し共に考えていくことで、教育は進歩していけるのだ。』これは私が最も尊敬する恩師がくれた言葉である。生徒として憧れ尊敬した師と教師として憧れ尊敬した師、2人の師の思いを胸に今後も研鑽していく。

# 合同カンファレンス・ラウンドテーブル報告

## 11月　合同カンファレンスに参加して

学校改革マネジメントコース1年履修／坂井市立加戸小学校　**渡辺　邦彦**

季節は移ろい、キャンパス内の黄色や赤色の鮮やかな紅葉が、とても新鮮に感じられた。前回に続いて２回目の対面での参加だった。夏まではオンラインだったので、私にとって６階のカンファレンスルームはいまだに慣れない場所である。しかし、共に学び合う先生方が集まるにつれ、少しずつ期待感が高まっていた。

最初に、牧田秀昭先生からガイダンスがあった。他校の研究会に参加する場合、当然ながら目的をもって参加するのだが、もう少し広い視野をもって、たとえば、なぜそうなっているのか、「背景」を見る余裕もぜひもって参加してほしい、とのご示唆をいただいた。私はコロナ禍前に参加した、ある授業研究会を思い出していた。３回目の参加で、社会科のＹ先生が“お目当て”だった。黒板ではなくホワイトボードに常時接続のプロジェクターからの映像が映し出され、児童はタブレットを開いていることが当たり前になっていた。当時の私は、当たり前のICT環境にも少しは興味があったが、それよりもやはり担任としての視線で拝見していた。一つのテーマに対して、児童が思考を巡らせながら発言していく。時には脱線もあって微笑ましいが、またあるときは手元のタブレットを駆使して情報を検索して提示したり、簡単にグラフを作って視覚化したりする

児童の姿に感心させられた。牧田先生のおっしゃる「背景」とは何か。３回参加したこの学校では、他の授業でも、ほぼこのスタイルである。つまり、先生が教え込んでいるところはあまり見たことがない。また、一時間の結論やまとめのようなものが出ることは比較的少なく、むしろ思考が広まって、もやもや感の残ることが多いくらいだった。児童が主体的な学びを自然に行っている姿。私が３回も足を運んだ理由はここにあったのかもしれない。さらに今思えば、学校の教育方針、研究体制が整っていることの証だろう。帰宅してすぐ、その時は読みもしなかった研究冊子を探し出してみた。すると、「Teaching から Learning への授業観の転換」という文が目に飛び込んできた。

やはり。子どもの主体的な学び、個別最適な学びを、教師が個人個人で追求することはもちろん大切だと思うが、所属している学校の研究体制をつくることもまたとても重要であると、研究冊子を読み返しながら思った。しかしそれは自分の経験上、簡単なことではなかった。異動などによって、研究テーマや体制が“細切れ”になってしまう現実がある。さらに、前任者の継続を試みるが失敗した自分の経験や、管理職と担任との板挟みになってしまってつらい思いをしている研究主任の姿もよみがえってくる。

今回のカンファレンスがきっかけとなって、家でしまい込んでいた研究冊子を再び開きながら、当時の視点からは離れて、改めて考えを巡らせることができた。思いがけず「個人内ミニ省察」の時間をもつことができたのである。今週と来月に参加する研究会でも、ぜひ、広い視野をもって参加しようと思う。

他校から学ぶ・・・インターンの両先生は、附属義務教育学校の授業参観で感じたことを語られた。お一人は「知りたいこと、ありますか？」という斬新な問いについて、もうお一人は「発問」と並んで「問い返し（なんでそう思ったの？）」の重要性についてであった。授業を検討する際に、やはり発問は重要である。しかし、指導案はあくまでも「案」。子どもと一緒に先生も学ぶ姿っていいですよね、という話に皆さんが賛同した。私は、教員になりたての頃、「教育は共育だ」と思い込んで、子どもと一緒に遊ぶことから始めた。教師にとって学び続けることは大切で、いろいろなことにアンテナを高くしていたいと思っている。しかし、何でもかんでも教え込むことや、手取り足取り先回りして教えてしまうことは、学ぼうとする児童の意思を摘んでしまうことにならないか。私は、答えのない、どう展開するかわからない授業をともに楽しみたい、と思うことが次第に増えていった。

近年の、県内高等学校の学科再編、名称変更について話題となった。キーワードは「探究」。学習指導要領の改訂もあって、最近注目される言葉だ。福井大学教育学部では、ずっと前から「探求ネットワーク」という活動が脈々と続いているそうだ。先ほどの、子どもとともに先生も学ぶ、楽しむ、という考えはこの「たんきゅう」がぴったりではないかと思う。（漢字も違うし、イメージだけでそう思っているのだが…。）高等学校の探究の授業については、若狭高校の例などで拝見することがあったが、そこにつながる中学校や小学校でも、今後さらに研究が進むだろう。教職大学院で様々な校種の先生方と語り合うことは、このようなことを考える上でもたいへん有意義であると、実感できる機会となった。いろいろな先生と今後もつながる期待を高めながら学び続けたい。

# カンファレンスからもらえる勇気

学校改革マネジメントコース2年／福井市安居中学校　森阪　美文

午前中は、美浜町立美浜東小学校の大野靖幸先生からの実践報告であった。『「つなぐ」を意識したコミュニティ』と題して、みはま元気プロジェクトの取組について話された。美浜中学校に進学する美浜町内の三小が合同でプロジェクト学習を行うということに、大きな意義があると感じた。三校は離れているとおっしゃられていたが、このプロジェクトで子どもたちが協働することによって、互いの学びが深まるとともに、美浜町の担い手としての自己を強く意識し、町をよくしたいと考える仲間の存在、仲間との絆を深めることができる、タイトルにあるように人と人との心を「つなぐ」力を持った素晴らしいプロジェクトであると思った。

美浜町の課題を知る合同学習会に始まり、各校でそれぞれの課題を決め探究活動を行い、最後に「みはま元気フォーラム」で、各校の活動の成果を報告、課題を解決するアイデアを発表する。探究活動において町内の様々な世代の人達に関わり、最後に自分たちの提言を聞いてもらい意見をもらう。地域の人達とのつながりも「みはま元気フォーラム」を通してより一層強くなったと感じた。自分の学校の総合の実践についても振り返ることができるよい機会となった。

午後のグループセッションでも、大野先生と同じグループになり、大野先生からは自主学習ノートによって子どもに自主的な学びを広げる実践をお聴きした。子ども、保護者からよい反応が返ってきていること、自分のクラスだけでなく学校全体に自主学習ノートを広めていくことができているのがうれしいことをおっしゃられていた。午前、午後を通しての先生のお話から、真剣な思いや熱心で優れた取組は必ず人の心を動かし周りを変えていくものだということを再確認させていただいた。私自身について言えば、教科や道徳、学年経営の取組等において、日々、大小様々な壁にぶつかる。しかし、壁にぶつかった時にこそ、生徒や先生方からの声に耳を傾け、実践をしっかり振り返り、前向きな姿勢で改善を続けていこうと思った。

午後のセッションでは、大野先生以外に、以前同グループになった、マネジメントコースの東十郷小・小竹正純先生、角鹿小・夛田昌代先生と御一緒した。小竹先生からは、小学校に隣接する坂井高校の生徒が５年生にプログラミングを指導しに来てくれ、高校生も小学生も大いに満足した様子だったとの報告、夛田先生からは、角鹿小・中は今年から小中一貫校になったため、小中の子ども同士の協働・教員同士の協働を進めようと始めた「中学生サポートプログラム」が以前にこの話をお聞きした時より、軌道に乗り、さらに活動が充実してきているとのことをお聴きした。各先生方の熱心な実践を知り、私自身が奮起させられる時間となった。今後の長期実践報告作成に向け、今できることを精一杯努めていきたい。

# 11月　合同カンファレンスに参加して

学校改革マネジメントコース1年履修／福井市春山小学校　南部　和江

東京オリンピック開催の２０２１年も、あとわずかで終わりを向かえ、いよいよ２０２２年の足音が聞こえてきました。そして、私の教職大学院での１年履修も、まとめの段階に入ります。

昨年度の県のマネジメント研修は、「新型コロナウイルス感染症対策のための一斉臨時休業」と新任校への異動という中で始まりました。新しく異動してきた学校で、私にできることは何かと問い、悩みながらのスタートを切ったことを懐かしく思い出します。

さて、１０月から県内コロナ感染者ゼロが２ヶ月続き、先週、現任校で、全校一斉の全校朝礼が、２年近くぶりに体育館に集合して行われました。これまでは、各学級の教室のテレビで、校長先生や生徒指導の先生のお話を視聴していました。久々の全校朝礼に、子どもも教師も戸惑い気味の雰囲気を感じました。

しかし、２年前とは一変してしまったと感じるのは、全校一斉に集まったとはいえ、みんながマスクを着用していることです。前任校では以前、特別支援教育コーディネーターとして、全校朝礼で子ども達の様子や表情を見るようにしていました。今のようにマスクを着用していないので、子ども達の朝の表情が見て取れたものでした。「あれ、〇〇さん、なんだか元気がなさそう。」「〇〇さんは、まだ登校していないな。」など、変化に気づくことができました。ところが、新しく異動した学校では、子どもの名前や様子がなかなかつかめないことに不安を感じました。授業中や休み時間も、けんかや奇声を発する様子もなく、とても落ちついている学校であると感じました。しかし、そのような中でも、子どもの心の問題はたくさんあると感じました。昨年度の県のマネジメント研修では、異動してきたばかりの新鮮な気持ちで「ＳＷＯＴ分析」をしました。２年目となった現在も、いつもその気持ちで考えていかなければならないと思っています。

このように、学校現場の様子を分析し、学校に勤務しながら学べる教職大学院の学校拠点方式は、私にとって大切な場所となりました。平日の現場で疲れたなと思いながらも、週末に行われる「月間カンファレンス」は、大変貴重な学びがありました。現場での悩みも抱えながらも、頭の違う部分を使っている感覚を覚えました。もやもやとした気持ちが、すっきりと爽快感にも変わる時間でもありました。それは、新しい学びがあるからだと思います。「そうだったのか。」と違う視点で考えられたり、解決する糸口を与えていただいたりしました。昨年度、初めて受講した時は、話すことに慣れず緊張することが多かったと思います。しかし、いつもセッションの大学院の先生方や院生の皆さんがゆっくりと聞いてくださり、いつの間にか「月間カンファレンス」で話すことが楽しみになっていきました。

さらに、本年度の夏の研修でも、実際に同じ文献を読む中で、その人それぞれの受ける感覚が違ったり、同じだったりする部分があることに感動しました。学びを通して出会えるたくさんの仲間の存在が、教職大学院での学びを支えていただけたのだと思います。

さて、近年子ども達の学習には、「主体的な学び」が必要であるとしています。子ども自身がどんどん自分で学びたいと思える課題と環境が大切であると思います。私の担任する特別支援学級でも、「勉強なんかしないよ。先生の言う通りにはしないよ。」という子がいます。「いっしょに、漢字や計算のお勉強をしましょう。」では、まず１時間も持ちません。しかし、そんな子ども達が一気に「やりたい！」と思う課題がいくつかあります。

その中で本年度は、学級園で収穫したサツマイモを使ってスイーツを作り、「スイーツカフェ」を開き、保護者の方や先生方を招待するという学習をしました。子ども達は目を輝かせて、「どんなスイーツを作ろうか。」「招待状がいるんじゃない？」「メニューがいるんじゃない？」と言いながら、こちらが何も言わなくても、次々と展開をくり広げていきます。自分達でカフェを成功させようと、熱心にいろいろ知恵を出し合っていました。文字を書くのが嫌いだと言っていた児童も、招待状やメニューを一生懸命工夫を凝らして書いていました。算数の計算が苦手だと言っていた児童も、ケーキやスイートポテトを作るために、秤で重さを量ったり、砂糖の割合を計算したりしていました。

「主体的な学び」には、やはりワクワクする、相手意識のある課題が必要です。決められた、与えられた

課題では、全くのっては来ません。何かを成功させるためには、絶対にやらなければならないことがたくさんあります。この必然性がある課題であることが大切だと考えます。先日は、教職大学院の先生方にも、お忙しい中「プチカフェ」にお越しいただきました。子ども達は、ニコニコと笑顔で、カフェの店員さんとして働いていました。お客様として、保護者や先生方をおもてなしをすることによって、喜ばれることにやりがいも生まれてくるように思います。子ども達が自分からやりたくなる、飛びつくような課題や問題を考えて、これからも楽しく学ばせていきたいと思います。

さて、大人である私達にとっても、同様のことが言えます。教職大学院では、はじめ何を学べばよいのか、何をレポートに書くとよいのかと悩みました。しかし、教えてもらえるのを待っているのではいけないと感じました。自らの課題を決め、主体的に学んでいく姿勢が必要であると思いました。国内外の教育理論書をじっくり読み、教職大学院の先生方や全国各地の様々な立場の院生の方と語り合う中で、自問自答したり、現場にもどって振り返ったりしながら日々進んでいくことが学びであると改めて知りました。教職大学院という学ぶ環境に、自らを置かせていただけたこと、そして尊い学びをくださったことに感謝いたします。

# いきつくところは「見取る」

学校改革マネジメントコース2年／福井市安居中学校　**伊部　雅之**

１１月のカンファレンスを通して考えたことを書いていこうと思う。

ガイダンスで、「コンテンツではなくコンテクスト」という話が出た。私たちは、だれかの話を聞くと、すぐに使えるものがないかという視点で聞きたがることがある。そして早速帰って聞いたことをやってみるが、うまく行かないことが多い。それはなぜか。対象となるこども、学校が違うからである。「こうやればいい」という劇薬はないのである。答えは自分で見つけていかなくてはならない。自分が聞いたことをかみ砕いて理解し、対象となるこどもや学校を見取って現状をしっかり把握し、それらを合わせて自分なりの答えを出していかないといけないと思う。このレター原稿を書いていてふと、「見取る」をキーワードにして書いていけそうだなと思った。

話題提供として、高浜町の保育士さんであった先生が、附属幼稚園に異動して・・・ということであった。異動してすぐの心境、そして研究の必要性に対しての疑念などがあった。ただ、取り組んでいく中で感じるようになった研究への価値については、自分も共感できる部分が多くあった。自分も前任校まで、「研究会は面倒な会議」という思いがあったからだ。

先生の実践の中で、「失敗」と捉えていた発表会の事例があった。先生は「主体性」と「手を出す」というジレンマの中で、手を出してしまったから失敗と捉えていると感じているようだったが、自分は違う感じ方をした。「主体性＝教師はこどもに任せ、手を出さない」と捉えていることがよくあるように思う。私は次のように思う。何かを教師とこどもが行う場合、教師がその集団のどのこどもにスポットを当てているか。そしてその活動を通して、その集団、その子をどのように変容させようとしているか。そのようなことを教師が見通していることが重要だと考える。それまでに教師とこどもの関わりの中でつかんでいるこどもの「見取り」がしっかりとできていると、その活動において教師がどのように関わっていくとよいかが見えてくると思う。そのことも含めた見通しの中に、教師が手を出すことも入っていても、それ

は「失敗」ということにはならないと思うのである。ただ、そのような積み重ねがそれまでにあって、今回の活動ではこどもにすべてを任せるという見通しを立てていたのに、手を出してしまったということであるならば、手を出したことは失敗になるのかもしれない。こういう場合もあるだろう。こどもの見取りを誤り、現状ではできないのにもかかわらず、こどもに任せてしまうこともあるだろう。それは主体性という「ほったらかし」だと思う。だからこそ、教師がこどもを見取る力が、重要になってくるのである。その「見取り」をもとに教師がよりよい関わりを考えていかなくてはならないのである。

午前中のグループセッションでは、主にそれぞれの先生方の現状から意見交換を行った。

ある先生から、「研究をどのように定着させていくとよいものか？」という話題でいろいろな意見が出た。自分の立場からの考えとしては、「負担感を少なく」「研究の動機（理由）づけが必要」なことはもちろんよく分かる。でもやはり、その学校の研究主任をどう育てていくかに尽きるのではないかと思う。研究会を運営していくことは、言うほど簡単ではないと考える。自分はたまたま自分なりに考えるところがあったから、なんとか今でも持ちこたえているわけだが。

研究会での目的を明確にして、その目的を達成するために何をするとよいのか。その裏付けとして今の学校の現状はどうであるか。そういった視点を、その学校の研究主任がもつことができなければならないと思う。どの学校でも、今一度「自分の学校は何を目指しているのか」について先生方で話し合っていくことから始めていくことがよいのではと思う。研究主任には、自分の勤務校や先生方を「見取る」力が必要なのである。その自分の学校の見取りを共通理解して、そこから手立てを全教員で話し合っていくことが大事だと思う。

午後のグループセッションは、主に自分の長期実践研究の構想について語ることが中心であった。自分の構想としては、「自分がこれまで実践してきたことが、何であったのか」そして「自分が今現在実践していることが何であるのか」ということを話した。自分が今実践していることは、「人を育て、学校を育てる」ことに関わっているんだと自分で今の自分のことを「見取った」のである。

ニュースレター原稿を作成するために、薄っぺらいカンファレンスの記録を読み返していて、ふと「どれもいきつくところは『教師の見取り』だな。」と感じた。改めて読み返すことの重要さに気づかされた。私はこれから長期実践研究を書き進めていくことになる。この約２年間の記録を改めて読むところからスタートしていくことになるのだろう。また新たな気づきがあり、それを長期実践研究に書き加えることができればと思う。その長期実践研究もまた時間を置いて読むと何かを気づかせてくれるものになるのだろうから。

# ラウンドテーブル奈良 2021 に参加して

ミドルリーダー養成コース 2 年/関西大学中等部・高等部　宮﨑亮太

「JALOODA との対話―チームで仕事をするとは？」をテーマに協働探究ラウンドテーブル奈良 2021 が 11 月に開催された。ラウンドテーブルを通じて感じ考えたことについて記しておきたい。

COVID-19 の感染状況が落ち着きをみせ、奈良県内外から高校生、教員、教育関係者など百数十名余りが対面で一堂に会した。会場に到着すると、対面で集まるとことの独特の高揚感や不安と期待が入り混じる雰囲気が開始前から醸し出されていた。４名１

組のテーブルが 25 程度あり、久しぶりの職場関係者以外の多くの人々との対話の機会を前に、わざわざ時間をかけて集まることの意味とこの時間、この場で会って対話ができる奇縁への感謝など様々な気持ちが湧き上がってきた。各所から様々な人々が集うことが、いかに得難い機会であるかを身にしみて実感した。こうした点からも、COVID-19 感染拡大によって社会が変化し、それにともなって、私たちの意識も変化していることを感じ取ることができる。

アイスブレーキングでは、事前に考えるように連絡があった「【空の旅】を一言で表すと？」「初対面の方々と一緒に何かをするときの最初の気持ち」について、グループ（私が所属したグループは高校生２名と教員２名であった）で共有した。簡単な自己紹介から始まったが、全員マスクをしていて表情を読み取ることが難しい上にマスク越しで声の表情もまた捉えることが難しい状況であった。だからこそ、いつもよりていねいに聴くことが大切なのだと感じた。

最初のグループセッションが始まり、過去に起こったことを参考にしたフライトに関する事案について、チームでどのように解決するか話し合った。対話が始まると、グループメンバーがすぐに自分ごととして事案に向き合えた。リアルな状況に極めて近く、現実に起こりうる状況設定であったからなのか、はっきりわからない。私が授業で状況を想定させて対話をすると、どうしても自分ごとにならない場合がある。それとの違いは何であるのか。あとで振り返ったときに考えた。対話をしているなかでグループメンバーの高校生から修学旅行に行ったときの話が出た。非常に楽しく深い印象に残ったできごとであったとのことで、その経験をもとに想像を膨らませて話をしてくれた。あとで振り返ると４名とも空の旅を経験しており、その経験から想像して対話をおこなっていた。皆が違う経験から一つの状況を共有して、対話をするとき、その人がどのような経験を積み、どう歩んできたのか、そして、メンバーが今向き合っている状況に対してどう考えているか、今だけではなく、過去や未来もふまえてじっくり聴くことが対話には非常に重要なことであると、今更ながら言うまでもないことであるが、あらためて考えた。

もう一つ、対話が活発に展開された要因としていくつかのことを考えた。条件、ゴールが明確に示されたことである。最初のセッションでは、快適に効率よく、時間通りに、何より安全に到着せねばならない。また、与えられた状況設定は答えがない課題、しかし現実に起こりうる課題に向き合うというものであった。こうしたことは対話する際にメンバーのマインドを向き合わせるために大切なことであると思った。実際、話し合った結果、乗客に見通しを示す、乗客を巻き込んで状況、ゴールを共有して安心感につなげてワンチームになる、乗員どうしで細かい声かけをしあって、迅速に対応するために横につながるなど、チームで仕事をする際に重視されることにかかわる意見が多く出た。

次のセッションでは、より難しい状況設定が与えられ、最初のセッションとは違い、メンバーそれぞれに機長、整備士、管制官などの役割が与えられた。すると、メンバーに役割が与えられていなかった最初のセッションに比べると、よりメンバー各自が何をすべきか考えるようになった。それは、メンバーから出た意見がより具体的であり、課題解決に向けて詳細な対応策について、与えられた役割に応じて考えて、発言があったことから推測することができた。一方で、役割がそれぞれにあると、各自の役割からしか考えなくなることが垣間見えた。航空会社は専門的な細かい分業体制であるからこそ、チームを強く意識し、対話を通して意思疎通をしていくことが求められるのだと思った。

今回のラウンドテーブルでは、JAL の方々からお話を伺う時間があり、印象深いお話がいくつかあった。JAL では OODA ループの理論を取り入れた、独自の哲学をもっている。どんな問題が起きてもプラスに受け止める「プラス受信」である。航空機運航はわずかなミスが命にかかわる。ともすれば、ネガティブな思考に陥りやすいが、マイナスに受け止めるとマイナスのスパイラルになり、他人や環境のせい

にして自分が被害者となり、好転しない。そこで、どのような問題でもチャンスと捉えて、「チャンス！」と声に出すそうである。思考習慣を身につけるためのこうしたトレーニングを繰り返すということであった。そうしていくうちに、客観的、機会的、好意的に物事を捉えることができるようになると、うまくいくようになるそうである。実際に全てが順調にうまくいくわけではないとは思うが、各自が自分のマインドを意識して、火付け役になろうとすることで組織全体が変わっていくということである。

With コロナ、After コロナを見据えた新しい社会へ向けて地殻変動が起こっている。誰もまだ経験したことのない社会へ入っていくためには、一人の力ではなく対話を重ねてチームで取り組むことが求められる。チームで仕事をすることはコロナ禍以前でも簡単ではない。これからは様々な制約がかかったかたちで進めていかなくてはならない。ゆえに、ていねいかつ綿密なチームづくりと対話の仕掛けが特に必要である。まさに JAL の哲学とチームビルディングのあり方を今回学んだことは、コロナ禍を乗り越えて新しい地平に立とうとしている私たちに大きな示唆を与えてくれたように思われる。

# 長く続く活動と問い直す議論

授業研究・教職専門性開発コース 2 年/福井市中藤小学校　大西　美穂

今回の 11 月合同カンファレンスでは、「他校の研究から学び、他校の研究を支える」というテーマのもと、グループで意見の交換・検討を行いました。グループでは、他校の研究を踏まえたからこそ見えた、「行事・実践の価値」や「世代を超えるための引きつぎ」、「教師が子供と楽しむ授業スタイル」などの重要性について話し合うことができました。

特に、「行事・実践の価値」については、全体の場で発表された大野先生と同じグループだった渡辺先生の話で議論が進みました。その中で、「10 年以上続けている学年行事はなぜ続けているのか」や「単にこなすだけになっているのではないか」という声が上がりました。10 年以上の活動は、発案にかかわった教員が残っていることはほぼないに等しい。引き継がれてきた中、代わる代わる様々な教員が担当となって行われていると思います。「年月が経ちながらも成功し続けると、活動が固定化され目的を見失う」という言葉もグループワークの中でありましたが、これこそが“こなす”という課題を色濃くしているのかもしれません。

活動の必要性や意図に関して、自身の現状と照らし合わせてみます。私が今携わっているのは、ストレートマスターの院生が行っている週間カンファレンスの運営です。この週間カンファレンスは主に 2 年生が中心となって運営され、長く続くカンファレンスです。しかし、私たちの世代は新たな大学院として組織されました。新たなコースが設立されたことで、今年度の金曜カンファレンスの運営は大きな改革が求められました。それは、今までの伝統を保ちながらも、自分たちが求めることを掛け合わせなければならず、小さな問題から一つずつ考えていきました。

今まで積み上げられてきた伝統的な取り組みは、簡単に排除することはできません。反対派や賛成派がいる中、人数が偏っていたとしても少数派の意見を尊重しなければ、今後の活動が危うくなる可能性があります。「続けていくことが大変だからやめよう」という一言で済ませてしまう問題では収まらないことをこの半年で大いに実感しました。その問題の 1 つとして、カンファレンス時に毎週作成するレジュメの作成がありました。今までのレジュメは、活動の意

図や目的を毎時、詳細に書き込む必要がありました。しかし、私たちが行う際、活動の意図や目的を書かかないでおこうという意見が出ました。確かに、意図や目的を理解したうえで文章化は負担が大きいという意見が大きいのではという意見は今まで何度もありました。一方、参加してくださる先生方に失礼ではというご意見も出ました。両者の意見はどちらも間違ってはいません。そのため、新たに議論が始まりました。「レジュメは何のために、誰のために必要なのか」、「発行する意味は」など１つ１つの意味を確認しました。そして、最終的には、全員が活動の目的や見通しの共通理解を深く図っていくことでレジュメの改定が行われました。

このような経験から、伝統的に続いた活動の改定は全員で問い直すことが重要であると実感しました。実は、この問い直しは同じ同期の院生と雑談のような形から始まりました。雑談の中で「会議に出してみよう」となり、今回のような議論を生み出すきっかけへと変化しました。もしかすると、改革というものはこのような小さな“雑談”から始まっていくのかもしれません。

# 私はすぐには動けない

授業研究・教職専門性開発コース２年/福井市中藤小学校　**岩城　つばさ**

ある日のインターンシップ先の小学校での出来事。この日は、午後から就学児健康診断があり、私は聴覚検査の補助を任された。聴覚検査が始まると、私の目の前の男の子が検査の為の準備に戸惑っている。担当教員は「大きい方（ヘッドホン）を右手で持って、右耳に当てます。」というが、先ほどの男の子は、相変わらず戸惑った様子でヘッドホンを左手で持つ。私は、「大きい方という言葉でわかったのかな。この子は周りを見て持ち手を変えるのだろうか。」などと考えながら男の子を見つめる。次の瞬間、検査の様子を遠くで見ていた先生が、その場に駆け寄って来て、すぐさま男の子の持ち手が違うことを指摘して正す。私は、その光景を見て、「あ～！またやってしまった。私の仕事は男の子を見つめることではなかったのに！」と、内心反省する。また、私はすぐには動けなかった。

今回は、11 月の合同カンファレンスでの学びについて報告する場であるにも関わらず、随分と前置きが長くなってしまったので本題に移ることにする。11 月の合同カンファレンスのテーマが「他校の研究から学び、他校の研究を支える」であったことから、私は11 月３日にオンラインで開催された福井大学附属幼稚園の研究会でのことをお話しさせていただいた。「小学校にインターンシップに行っているのになぜ幼稚園？」と疑問を抱かれる方もいらっしゃるかも知れないので補足をすると、私は現在、中藤小学校の特別支援学級で学ばせていただいている。今年になって初めて深く関わり出した児童が、自閉症スペクトラムがあり、私はその児童とコミュニュケーションをとることが難しかった。そこで、現在はその児童とのものづくりを通したコミュニュケーションに挑戦しているのだが、その活動のヒントを得るべく、幼稚園の研究会に参加したのが経緯である。附属幼稚園の実践で印象的だったのが、「モノ」と子どもがどのように関わっていくのかを丁寧に見取っていたことである。加えて、教師がどの立ち位置でモノと子どもとの関わりに参加するのかといったことも考えながら実践をされていたように感じられた。当たり前のことではあるが、活動があってそこに子どもがいるのではなく、子どもがモノや人と偶然に出会い、関わる中で、必然性を持って主体的に働きかけていく。報告を聞くだけでは、一見綺麗な物語のように聞こえるのだが、実際には、子どもの主体性を引き出しながら活動を進めていく中で、様々な困難さや戸惑いと出会っていた。

さて、ここで最初の話に戻る。私は、就学児健康診断での出来事をその時は反省するのだが、同時に私のことだからまたすぐに子どもをじっと見つめてしまうのだろうとも感じる。それはなぜか。おそらく私自身が教職大学院に入ってからこれまで、そうやって子どもを見つめてきたからであろう。そうやって子どもと付き合って、一緒に活動して、子どもの姿から学んできたからであろう。学校現場で学んでいると、大人が子どもの話をすることがあまり多くないように感じる。大人がやらせてやりたいことに子どもが付き合うような場面がほとんどである。私自身も例外ではなく、授業になると、どうしても子どもを引っ張っていくような指示をしてしまうこともある。もしかすると、このような大人（教師）と子どもの関係性を創り変えていくことに大きな意味があるのではないかと、今回の幼稚園での実践を聞いて考えさせられた。そして、大人と子どもの関係を創り変え、自分の実践の中に子どもの姿、現実を組み込んでいくための第一歩であるのが、子どもをじっくりと見取っていくことであると考える。そういった意味を込めて、私はこれからも「すぐには動けない」人でありたいと思う。

# 「多様な視点から見取る＋学びを振り返る」こと

**授業研究・教職専門性開発コース1年/福井市明新小学校　魚見　晏那**

大学院に進んでから 9 カ月が経ったが、新型コロナウイルスの影響で、今回の 11 月カンファレンスが私にとって初めて対面でのカンファレンスとなった。今までオンラインで参加してきて、オンラインの便利さに良さを感じていたが、カンファレンス会場に行くと先生方の話し声が聞こえる空間の良さがあったり、表情を直接見ることができコミュニケーションがとりやすかったりするなどオンラインとは違った良さを感じた。

今回の 11 月月間カンファレンスでは「他校の研究から学び、他校の研究を支える」というテーマで行われた。異校種の先生方との交流を通して、多くの学びを得ることができた。午前と午後のセッションを通して印象に残った話題は、主に二つある。

はじめに、多様な視点から見取ることについてである。同じ校種でも学びの基盤が大きく異なるため、研究会や他校の様子を見る中で、気がかりな子どもに対して合理的な配慮や上手い声かけをしている先生の存在を目にすると伺った。他校の学びを見取る上でいろんな見取り方のどこに着目し、その学びを自身の学びの捉え方に活かすことができるかが重要であると話し合いの中で感じた。私自身、インターンシップでも他校の様子を見る中でもどういった視点から見取るのか、何を見取りそこから何を学ぶのかということをより深く考える必要があると感じた。今後のインターンシップや研究会での見取り方について考える機会となった。

二つ目に印象に残った話題は、福井大学教育学部附属幼稚園の岡山佳耶先生の実践である。オリエンテーションや午後のセッションで、高浜町の保育園と附属幼稚園の実践を通した学びについてのお話を伺った。違いがあるからできないと決めつけるのではなく、違いを活かして、〇〇らしさ、〇〇の強みという独自性を活かすことや学んだことを持ち帰って共有して、教育へ生かし、次へつなげることの重要性について学んだ。他校の学びに参加することは多様な視点から見ることで自身が問い、自分に活かすものになったり、逆にその授業などに否定的に考えを持つことで自分自身の捉え方を見直し、学びとなる。自分だけが学ぶのではなく、インフルエンサーとして学んできたことや考えを広げていく必要があると感じた。さらに、子どもの主体性については教育者が

頑張っている活動は子どもたちは活動に取り組めていないため、子どもたちの発意は何なのかを日頃から観察し、それを生かしていくことが重要であることが分かった。教師側が頑張る授業というのは子どもたちがあまりいい動きができていない。子どもたちと教師が同じ力量で取り組めるような授業づくりができるよう、主体性のある授業づくりや子どもを育めるように学び続けたいと話し合いを行う中で感じた。

今回のカンファレンスを振り返って他校の学びの捉え方について大いに考え、学ぶことができた。今回の話し合いの中で、他校の学びについてどういう見取り方をするのかや学んだことをどう活かしていくのかなど、私はまだ浅い部分があると感じた。他の先生方の考えや見取り方について新たに知れたことは今後のインターンシップや他校の研究会などの学びに活かせるのではないかと考える。これらの学びを今後に活かせるようにしたい。

# 修了生だより

Newsletter153 号で修了生の方に実践や近況についての投稿の呼びかけをいたしました。今回、2013 年度修了生の小川さんから投稿がありましたので、ご紹介いたします。小川さんは併設型中高一貫校である高志中学校で授業力向上チーム「Team Manabee（チームマナビー）を立ち上げ、メンバーの先生方と授業記録や授業参観記録を作成したり、お互いの授業実践から生徒の学びの姿をもとに語り合ったりされているということです。

今回は２ページ構成で送られてきた原稿の全体レイアウトをそのままいかして、次ページに掲載させていただきます。

# 「生徒の学びの姿」から考える授業の在り方

福井県立高志中学校 **小川 駿也**

現任校の福井県立高志中学校は、2015 年 4 月に高志高校に併設された中高一貫校である。2021 年 3 月にその 1 期生が高校を卒業し、中高一貫校として第 2 期に突入した今年度、高志中学校の教員で授業力向上チーム「Team Manabee(チーム・マナビー)」を立ち上げた。目的は、中高 6 年間の学びを通して生徒に身に付けてほしい資質・能力について、気軽な授業公開や授業参観、授業記録の共有などをしながら明らかにすることである。そしてこのチームで大切にしているのは、活動の持続可能性と発展性である。

前者については明確なノルマや目標到達時期を設定してしまうと、どうしても「やらされ感」や「切迫感」が生まれてしまう。メンバーが「授業を公開したい」、「参観したことを記録にまとめたい」と思えたタイミングを大切にし、そのことをきっかけに関連する話題を回覧で共有しながら活動している。また、後者については、上述の活動を振り返って、8 月に「前期授業実践報告会」と題してメンバーが実践を共有しながら、「生徒の学びの姿」と「それを支える要因」について話し合った。ここでは、「生徒の日常に関連する問いの重要性」や「生徒が課題を自分事にすることで思考が深まっていること」などを確認した。12月にメンバー以外の中高・外部の教員を「聴き手」に招いて、ラウンド・テーブルを実施する予定である。このように緩やかに発展していくスパイラルを描きながら活動し、中高6年間で目指す生徒像とそれを授業の中でどのように育むのかということを考えていきたい。

蜂(Bee)のように、一人ひとりのメンバーがさまざまなところ(授業公開、授業参観、研修会など)に学びを集めに行き、素敵な蜂蜜(学びの成果)(Honey)を作って生徒に還元していくこと。「Team Manabee」はこれからも一歩ずつ進んでいきたい。

令和３年度　高志中学校授業力向上チーム　Team Manabee 通信
Honey
No.3
令和３年９月１７日

1．授業参観について

９月14日（火）、１年Ａ組の社会科（歴史的分野）の授業を公開しました。生徒は学習課題「厩戸皇子が目指した政治はいつ完成したのか」について、厩戸皇子死後の出来事を付箋に書いてジャムボードに並べながら、それぞれの出来事の結果やつながりを考えました。グループごとに厩戸皇子が目指した政治（天皇中心の政治、仏教を重視した政治、外国と対等な政治）の視点に照らし合わせて、その完成時期の話し合いが行われました。参観していただいた先生方、ありがとうございました。

グループで作成したジャムボード

630年 第一回遣唐使
645年 大化の改新
646年 改新の詔
633年 白村江の戦い
672年 壬申の乱
黄色の付箋に出来事を青色の付箋にそれらの説明や関連性を記し、オレンジの付箋に厩戸皇子が目指した政治の完成時期についてのグ

（活動紹介）※生徒氏名は全て仮名

松井教諭の理科の授業を山内教諭が参観した記録

授業参観記録

第２シート「デンプンの旅～吸収・その後～」は、シンプルにまとまっているが、第１シート「デンプンの旅～摂食から消化まで～」に皆が集中し、狭い部分にいろいろな内容を詰め込んでだんだん見えにくくなってくる。ここで、長野が「摂食からデキストリンや麦芽糖になっているから矢印がおかしいな」とつぶやくが、誰も意に介した様子はない。それでも、長野は自分で

デンプン ―アミラーゼ→ デキストリン ―アミラーゼ→ マルトース ―マルターゼ→ グルコース

という一方向の図を見つけ確信し、周りの生徒にそれを提示した後、シートの矢印を適切に直し始める。

終盤になって高野が、「これもうやることない。」と発言し、周りも同意する。それに続けて「左下の図、必要なくない？」と持ちかける。シート左下には、人間の体の図があり、デンプンからグルコースまで体のどの部位で変化するかを示したものがあった。しかし、それはネット上にあったものを貼り付けただけであり、見栄えはいいが分かりにくいと判断したのであろう、すぐさま消された。長野の「時計回りにする？」の言葉がけで、残り５分で皆が集中し、手分けして授業中盤のシートとは別物のすっきりとしたシンプルで分かりやすいシートができあがった。

[感想]
グループ学習というと活発に議論されることが良しとされますが、今回の授業では意見の交換は少ないものの各自が課題にしっかり向き合い、Jamboard を利用することで音声ではない思考の交換ができていたと思います。また、それぞれが質の高い学びを実現していました。巻は昨日いなかったにも関わらず、途中のシートを見て自分で疑問に思ったことについて理解を深めていたし、その隣で宇野は巻が調べている内容からデキストリンを誰にでも分かる（自分でも理解を深める）ようにするためにシートの内容を充実させていました。そして、長野はシートの細かい（でも本質的な）誤りを発見し、周りの者に納得させるための材料を提示し、高野の発言によりさらにシンプルで分かりやすい（自分たちの頭にも整理しやすい）ものへとシートの内容がどんどんよくなっていきました。予め役割を決めていないのに、それぞれができることから創りあげる様子も見られました。ありがとうございました。
山内義幸

１つのグループに注目し、そこで生起する生徒の学びと参観者の気付きが記述されている。

通信「Honey」を発行し、活動内容をメンバー以外の教員とも共有している。

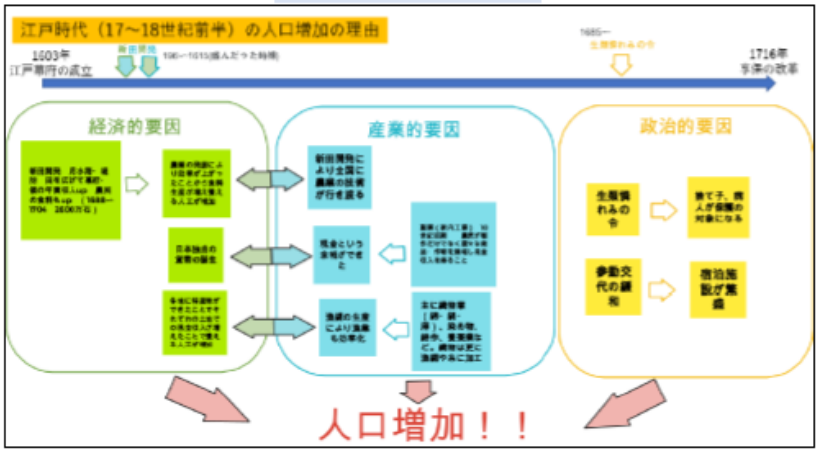
## 授業記録

授業者の視点からは、グループでの学びの断片やその成果しか見えないこともある。そこに、参観者の視点が入ることによって、生徒の学びが何によってどう深まったのかということが具体的になり、生徒の学びの過程が鮮明になる。授業記録や授業参観記録は、授業者が自身の実践を捉え直す上で有効である。

### 小川の社会（歴史的分野）の授業記録
### 授業者の気付きと山内教諭の参観記録をもとに作成

宇多、岡田、高木の 10 班は大坂の役後の 2 代将軍徳川秀忠の時代の「武家諸法度」や「一国一城令」によって戦乱のない平和な時代が訪れたり（元和偃武）、「5 人組」の制度により犯罪抑止や年貢を確実に納める構造が成立したりしたこと、幕府発行の貨幣の流通により、これまでの宗銭や明銭などの輸入銭が衰退したことで、他国の影響を受けなくなったことなどを説明していた。そして 2 班の説明を受けて、谷川、中田、森のグループは「生類憐みの令」が人の生命を大切にするようになったことを付箋に追加したり、政治的要因が人口増加につながることはないと考えていた森が納得したような表情を見せていたりと、生徒同士の学びが「江戸時代の人口増加」の理由についての捉え直しにつながっていた。

９班が作成したジャムボード




## 回覧

授業参観記録や授業記録に関連するトピックスを回覧することで、各教科の取り組みや先生がどのようなことを意識して授業に取り組んでいるのかなどを共有できている。これ以外にも授業研究についての書籍や他校の実践について回覧することもある。

### 授業記録、授業参観記録に関連するトピックスの回覧

令和３年度　高志中学校授業力向上チーム Team Manabee

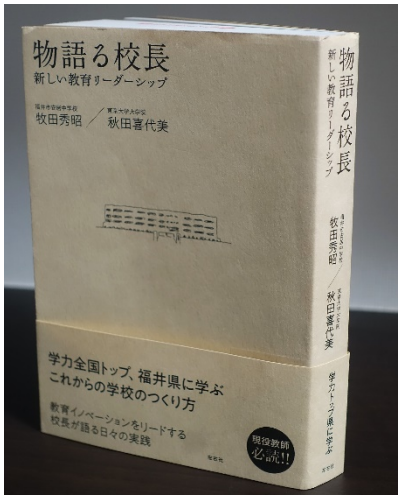
「授業の中で、生徒同士の学びがつながったり、生徒が自分の認識に疑いを持ったり（改まったり）した場面」について

| 先生 | ご意見 |
|---|---|
| 岸名先生 | 論説文を段落ごとに短冊にして、構成を考えさせる学習では、生徒同士の意見のすり合わせのプロセスから文章構成の深い知識につなげることができ、面白かったです。それぞれの意見を裁判、ディベートのように立論、反論させる中で、さまざまな視点が見出せました。 |
| 野崎先生 | 中１の授業では、まだいろいろな意見をもとに深めるような授業はできていませんが、他者の発表や発言を聞くことで、文法の間違いに気付いたり、自分の考えを持つことができたりしているように思います。レシテーションでは、発表の工夫の仕方や発表に大事なポイントを他者を見て評価することで自分に生かせている部分があると思います。 |
| 松井先生 | 「進化」についてグループで調べていく中で、進化の対義語は「退化」ではなく「無変化」、進化に退化も必要という教科書にはない視点を発見してくれて共有できたのはよかったです（30 人で１枚のジャムボードを作成しました）。 |
| 渡辺先生 | 以前、時間と目標・目的を明示し、課題に取り組んだことがあります。計算が主な内容でしたが、自分のミスの原因を他者に見てもらうことで発見し、お互いに注意すべきところ理解できた場面がありました。数学でクラスメイト間での見方の違いなど、自分の考えの相違を掘り下げていくことが難しいなと感じています。 |
| 松田純先生 | 理科では、科学用語としての定義とは別に、日常語としてより広い意味で（科学的には間違った使い方で）定着している言葉が結構あり、生徒はある程度「区別されるべきなんだろう」と思っているものの、整理が不十分で混在しているということがよくあります。「理科ではこういう意味で使います！」と言ってしまうこともありますが、個々のイメージを共有化していく活動の中で、理科としての整理の視点が生徒の意見から全体のものになることもあります。 |
| 山内先生 | 「つながり」を意識させることも大切で、「深い学び」とはバラバラなものがつながることだと思います。 |

# 図書紹介

## 牧田秀昭 ・ 秋田喜代美
## 『物語る校長――新しい教育リーダーシップ』
## （左右社、2021 年）

福井大学連合教職大学院 准教授　**遠藤 貴広**




福井大学連合教職大学院の拠点校でもある福井大学教育学部附属義務教育学校と福井市安居中学校でそれぞれ副校長と校長を務めた牧田秀昭先生による「学校づくりの記」。学校改革マネジメントのプロセスを、そのときどきに発行していた校長通信を織り込みながら構成。そこに、長く牧田先生に伴走してきた秋田喜代美先生の解説。地方の小さな学校で日々展開している出来事が、世界の教育改革の大きなヴィジョンにどう位置付いていくのか、著者の肩肘張らない語りで、すっと読める。

本教職大学院では、実践研究福井ラウンドテーブルを基軸に多様な教師教育実践が地域の学校現場で展開しているが、本書はその典型となるもの。本教職大学院の取り組みのエッセンスを凝縮させたものとしても興味深く、このような実践の展開を支えるために教職大学院があることを再認識させられる。「福井方式」などとも呼ばれる本学の教師教育の取り組みが地域の学校現場ではどのような実践として引き現れるのか、これを知るのに今もっとも便利な一冊。

出版社サイトに「校長・教頭など学校管理職志望者必読の一冊」とあるが、私の周りでは、新しい授業づくりにチャレンジする若い先生たちによく読まれている。大学の教職課程担当者としては、これから教員になる学生にこそ読んでもらいたい一冊で、実際、学部生にも読みやすいものであるため、教職課程のテキストとしても利用し、去年までとは明らかに違う授業の展開が起こっている。

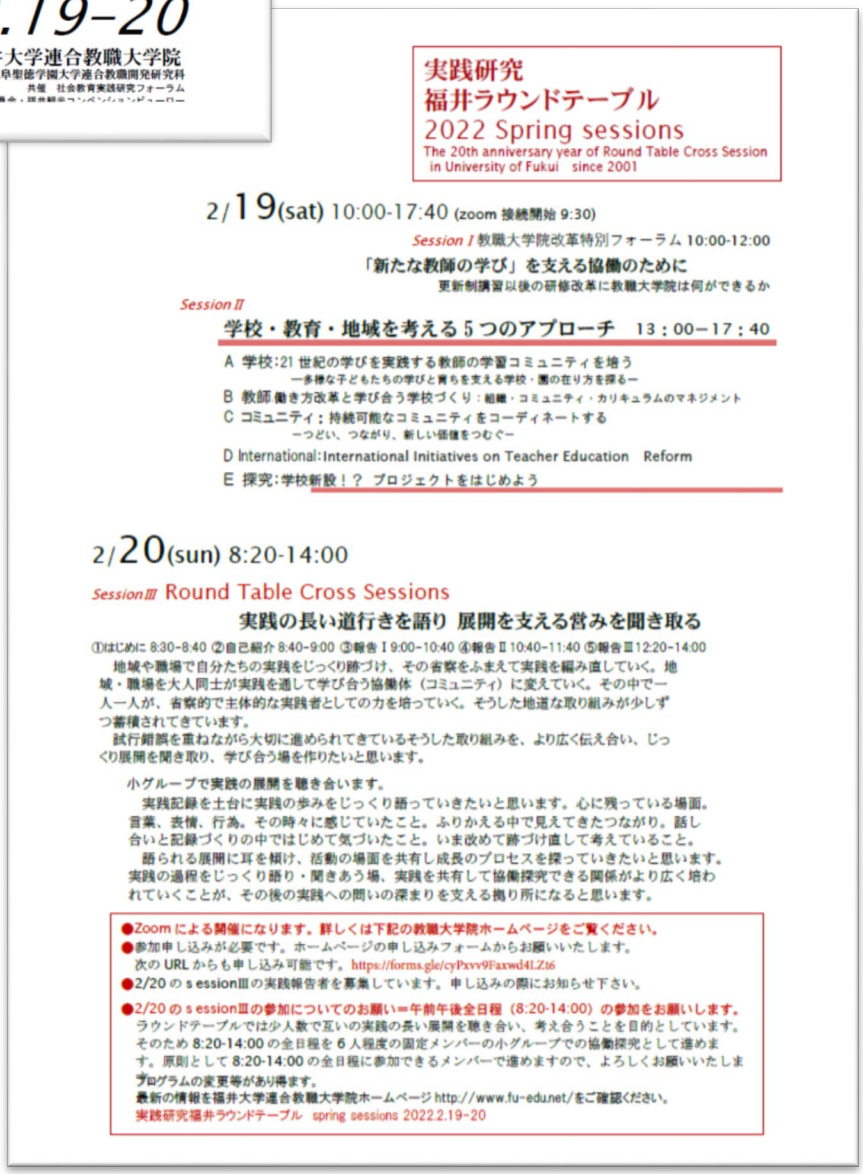
校長による実践記録としては、デボラ・マイヤー『学校を変える力（*The Power of Their Ideas*）』や斎藤喜博『学校づくりの記』が本教職大学院の夏期集中講座などでよく読まれているが、本書もこれに並ぶ一冊となる。長期実践研究報告の新たなレパートリーにもなるもので、執筆に行き詰まった院生には光明となるかもしれない。こんな書き方、トーンもあるか･･･と。

本書には、著者が普段紡いでいる折々の記録が多数織り込まれているが、その記録から、日常の実践を見る著者のまなざしを追体験することもできる。また、「授業を見せ合いましょう」「生徒を主役にしましょう」と言うだけでは何も動かない現実の中での具体的な仕組みの整え方も知ることができる。それは、実践を参観しているだけでは決して学べないものである。しかも、その背後にある理念・哲学・思想も確かなもので、実践に埋め込まれている理論を繙くための導き糸も与えてくれる。これが福井の実践から紡ぎ出されていることが、本教職大学院にとってはありがたい。

実践のストーリーを語ること自体がスクールリーダーの学びのプロセスとなることを鮮明に示した実践記録本として、日本の教育実践史においても画期的な一冊となることは確実である。

実践研究福井ラウンドテーブル
2022SpringSessions が開催されます。

詳細はホームページをご覧下さい。



実践研究
福井ラウンドテーブル
2022 Spring sessions
The 20th anniversary year of Round Table Cross Session in University of Fukui since 2001

2/19(sat) 10:00-17:40 (zoom 接続開始 9:30)

*Session I* 教職大学院改革特別フォーラム 10:00-12:00

「新たな教師の学び」を支える協働のために

更新制講習以後の研修改革に教職大学院は何ができるか

*Session II*

学校・教育・地域を考える５つのアプローチ　13：00−17：40

A 学校:21 世紀の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う
—多様な子どもたちの学びと育ちを支える学校・園の在り方を探る—
B 教師:働き方改革と学び合う学校づくり：組織・コミュニティ・カリキュラムのマネジメント
C コミュニティ：持続可能なコミュニティをコーディネートする
—つどい、つながり、新しい価値をつむぐ—
D International:International Initiatives on Teacher Education Reform
E 探究:学校新設！？ プロジェクトをはじめよう

2/20(sun) 8:20-14:00

*Session III* Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 8:30-8:40 ②自己紹介 8:40-9:00 ③報告Ⅰ9:00-10:40 ④報告Ⅱ10:40-11:40 ⑤報告Ⅲ12:20-14:00

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々に感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

●Zoom による開催になります。詳しくは下記の教職大学院ホームページをご覧ください。
●参加申し込みが必要です。ホームページの申し込みフォームからお願いいたします。
次の URL からも申し込み可能です。https://forms.gle/cyPxvv9Faxwd4LZt6
●2/20 の s essionⅢの実践報告者を募集しています。申し込みの際にお知らせ下さい。
●2/20 の s essionⅢの参加についてのお願い＝午前午後全日程（8:20-14:00）の参加をお願いします。
ラウンドテーブルでは少人数で互いの実践の長い展開を聴き合い、考え合うことを目的としています。そのため 8:20-14:00 の全日程を 6 人程度の固定メンバーの小グループでの協働探究として進めます。原則として 8:20-14:00 の全日程に参加できるメンバーで進めますので、よろしくお願いいたしまプログラムの変更等があり得ます。
最新の情報を福井大学連合教職大学院ホームページ http://www.fu-edu.net/をご確認ください。
実践研究福井ラウンドテーブル　spring sessions 2022.2.19-20

**Schedule**

| | | | |
|---|---|---|---|
| **12/26 Sun.** | 第 **2** 回大学院入試説明会 | | |
| **12/26-28** | 冬期集中講座 **A** 日程 | **2022/1/4-6** | 冬期集中講座 **B** 日程 |
| **2/5 Sat.** | 第 **2** 回大学院入試 | **2022/2/6 Sun.** | 長期実践研究報告会 |
| **2/19-20** | 実践研究福井ラウンドテーブル **Spring Sessions 2022** | | |

Newsletter は、教職大学院に関わる皆さんの協力で作られています。
修了生の皆様もご自身の実践や近況について投稿してみませんか。
関心がある方は、dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp までご連絡ください。

【 編集後記 】冬の集中講座が開始されます。今年度、修了される院生の方は、いよいよ正念場で、苦しいこともあると思います。長期実践研究報告書は成果報告書ではなく、これからも続く道の途中です。スタッフ共々、一緒に歩いてきます。今号では通常記事に併せて、修了生の方からの投稿がありました。修了生の方の近況・実践は、今を生きる院生、スタッフにとって励みになります。ありがとうございました。（Y）

教職大学院 Newsletter　No.154

2021.12.26　内報版発行
2022.1.24　公開版発行
編集・発行・印刷
福井大学大学院　福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507　福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp